みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

土方久功と南洋群島

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009295

土方久功と南洋群島

須藤　健一
国立民族学博物館長

1　ミクロネシア今昔
2　土方の南洋行
3　土方の南洋研究
4　土方の研究成果
5　民族誌家としての土方

1　ミクロネシア今昔

日本列島の南，東西5,000キロの洋上に連なるミクロネシアの島々。土方久功が1929（昭和4）年から13年間を過した島世界である。土方が調査研究と創作活動の舞台としたふたつの島，パラオとサテワヌ（サタワル）は，80年を経た現在，それぞれ「パラオ共和国」，「ミクロネシア連邦」という国になっている。

サタワルが属すミクロネシア連邦は1986年に独立し，91年9月に国際連合に加盟した。また，パラオ共和国は，1994年に独立し，翌年に国連に加盟し，それぞれアメリカ合衆国の統治から離脱し，近代国家として国際社会の仲間入りをはたした。

ミクロネシアは1521年にマゼランがグァム島へ寄港して以来，世界史に登場する。それ以降，グァム島を除くマリアナ，カロリン，マーシャルの3つの群島は，スペイン，ドイツ，日本，そしてアメリカの支配下におかれた。日本は第一次世界大戦（1914年）を契機に，ドイツ領であったそれら3群島を手に入れ，1920年から25年間，国際連盟の委任統治領および植民地として，「南洋群島」の名のもとにおさめてきた。

土方が最初に訪れたパラオ諸島のコロール島に，日本は南洋群島の中枢ともいうべき南洋庁を1922年に設置し，パラオのコロールのほか，サイパン，ヤップ，チューク（旧名トラック），ポーンペイ（旧名ポナペ），ヤルート（マーシャル）の計6つの島に支庁をおき，統治政策を実施した。この南洋群島には，日本からの農業・漁業移民，役人，商人，軍属などが住み，1940年ころの在留邦人の人口は10万人を数えた。それは島の住民人口の二倍にあたる。

第二次世界大戦後の1947年から南洋群島はアメリカ合衆国の国連信託統治領太平洋諸島となった。そして，1970年代から，それらの島々は「民族自立」への道を歩み始めた。

ミクロネシアの歴史は，いかだやカヌーに乗って海を探険したときに始まった。ミクロネシア

の国は，星を頼りに航海したときに生れた。我われの世界はそれ自体ひとつの島である。

しかしながら，憲法の前文に美しい一文を掲げ，「海洋統一国家」としてのミクロネシア連邦の建設を目指した人々の願いはかなえられなかった。国づくりの過程でアメリカの極東軍事構想や地域間の経済格差などの問題があらわになったからである。現在30万の人々が住む旧南洋群島は，結局4つの「極小国家」に分裂してしまった。

サイパンを中心とするマリアナの島々は，アメリカの自治領「北マリアナ諸島コモンウェルス」としていち早く1975年に離脱した。あとの島々も，世界で初めて憲法に核廃絶をうたった「ベラウ（パラオ）共和国」，ヤップ，チューク，ポーンペイ，コシャエ（旧名クサイエ）の4州からなる「ミクロネシア連邦」と，悲惨な原水爆実験の被爆で知られる「マーシャル諸島共和国」として，それぞれアメリカと「自由連合」の関係を保持する3つの国となった。ミクロネシア連邦とマーシャル諸島共和国は1986年に，パラオ共和国は1994年にそれぞれ独立した。パラオは非核憲法の「改正」，つまり「核持ち込み容認」を独立と経済援助の条件にするアメリカの要求を拒否したために独立が遅れたのである。日本の植民地にされたせいで，戦争を経験したパラオの人々は，もう二度と国民と国土を大国の犠牲にしたくないという，当然の主張をしたにすぎないのだが。

土方が「南洋原始」を求めて最初に渡ったパラオは，独立をめぐりアメリカと10年余の交渉をした。とはいえ，1981年に自治政府を発足させ，人口1万4000人の「国家」をつくりあげた。パラオの人々は，古来から「進取の精神」に富み，アメリカ統治後多くの若者がアメリカなど海外の大学で教育を受け，そこで活躍している。現在，グァム，ハワイやアメリカ本土に住む人は，2万人の国民人口の3割を占める。そして，土方が歩いた村々は州に格上げされたが，人々は暫定首都コロールに職を求めて移り住み，その人口たるや1万人を越す。

そして，パラオではフィリピンや中国などから6,000人以上の労働者がパラオで農業従事者，ホテルや種々のサービス業の従業員や家庭のメイドなどとして働いている。グァムから週10便，マニラ，台北から毎日のように飛行機便があり，日本やアメリカから7万人もの観光客が訪れ，観光立国としての基盤整備を進めている。ヤシの木の茂る砂浜や，ロックアイランドを見渡せる丘にいくつもホテルが建ち，海洋レジャーの設備も整っている。しかし，パラオの人々は近代化だけを追い求めてはいない。

日本時代に海岸部へ強制移住させられるまで，人々は山の中腹の集落に住んでいた。そこには大きな集会所（アバイ）を中心に石畳に沿って鞍型屋根の家が建ちならぶ村があった。しかし，日本時代に廃墟と化した村々から，「絵物語」で飾られたアバイの荘重な姿は消え失せた。今，パラオ中で3軒のアバイしか見ることができない。アイライ州の昔ながらのアバイ，マルキョクの旧村と，パラオ国立博物館の脇に復元されたアバ

イである。パラオの人々はこれらの伝統文化を後世に残すべく努力をしている。1976年にはパラオの歴史を自らの手で調べあげ, 600頁からなる3巻本, *A History of Palau*(『パラオの歴史』）を刊行している。また,『パラオ語辞書』も1990年代に完成させた。

パラオの人々が自分の伝統文化と過去を大事にする文化活動に，土方は大きく貢献している。ひとつは，80年前のアバイ絵にパラオの民族芸術の豊かな感性を見抜いた土方は，それを厚板に手斧で彫り込む技法をパラオの子供たちに教えたことである。アバイ絵は文字をもたなかったパラオの歴史を伝える物語である。失われゆく文化を目の当たりにした土方は，近代彫刻や西洋絵画でなく，すばらしいパラオの芸術に新たな息を吹き込む教育を行ったのである。彼の弟子たちがつくりあげる「ストーリーボード」は現在，博物館だけでなくホテルのロビーの壁を飾り，また多くの観光客に1枚数百ドルで買い求められている。もうひとつは，土方が昭和初年に記録したパラオの文化史やその当時の生活誌などの著作である。それはパラオの人々が自分の歴史を再考するうえでかけがえのないものとなり，前述の『パラオの歴史』の骨格をなしている。

パラオ共和国は近代国家として体制を整えると同時に，伝統文化の復興による国民文化の創生と国民意識の高揚を目指している。パラオのいくつかの州では昔の村を復元する計画が構想されていると聞く。パラオの人々が，「我われはパラオ人である」ということに誇りをもち，自らの国民文化を創造しようとする心のなかに，土方の精神が根強く生き続けてゆくにちがいない。

いっぽう，土方が7年間も滞在したサタワル島は，ミクロネシアのなかでもとりわけ「小さな島」である。行政的にはミクロネシア連邦ヤップ州に属すが，ヤップ島から1,000キロも離れている。700人が1平方キロのこの島に暮らしているが，今でも2～3か月に一度，コプラ（乾燥させたココヤシの果肉）の買いつけや生活物資の輸送のために定期船が来るだけである。土方がいたときとくらべても，さほど交通の便は良くなってはいない。人々は60年前にキリスト教を受容した。けれども，サタワルは伝統的な生活様式を現在に伝えている太平洋でも数少ない島のひとつである。

サタワル文化の伝統性は航海術に代表される。海のただ中の島とはいえ，隆起珊瑚礁の島の周辺では十分な漁獲をまかなえない。島の男たちは，遠くの無人島へウミガメや魚介類を求めてさかんに乗り出す。地味に乏しい島のもとでは，食糧や生活必需品の自給が不可能である。彼らは数百キロ離れた他島へ交易の航海にも出かけなければならない。動力船をあてにできないサタワルの人々は，それらの活動を昔ながらのカヌーで行っている。海図や磁気コンパス，六分儀などの文明の利器を用いなくても，「星座コンパス」を頼りに，潮流，波，風，星，太陽などの自然現象をたくみに応用した独自の航海術も保持している。そのようなサタワルのことが，1970年代以降日本やアメリカでたびたび話題になった。

沖縄国際海洋博覧会（1975年）と福岡アジア太平洋博覧会（の前年の1989年）に，

サタワルの男 6 人がカヌーを操って参加した。サタワルから日本まで 3,000 キロもの海を制覇した航海によって彼らの航海術の優秀さが遺憾なく証明された。また，1976 年には，アメリカの独立二百年祭を記念して企画されたハワイ人の故地タヒチ島への 4,500 キロの航海を指揮したのも，サタワルの航海者である。サタワルの人々は近代文明の恩恵に浴さなくても，太平洋の大海原を奔放に往来できる独自の航海術を編みだし，今に伝える偉大な海洋民の末裔なのである。80 年前，土方がこのサタワルの文化に注目し調査・研究の対象地に選んだことは卓見といえよう。

2　土方の南洋行

土方久功は 1924（大正 13）年に東京美術学校（現東京芸術大学）を卒業する。石膏彫刻や木彫り，詩の創作などの芸術活動に励むかたわら，南洋への夢をふくらませてゆく。南洋イメージは，たしかにゴーギャンのタヒチでの生活をつづった『ノアノア』におうところがおおきい。しかし，南洋への憧憬は，好きだったゴーギャンの絵やその生き方をとおしてだけではない。土方は日本の古代文化に親しみを感じ，「先史考古学・文化史をあさってゆくうちに『土人』にぶつかった」と，南洋行の動機を日記に書いている。

南洋，とくに日本の統治領「裏南洋」（ミクロネシア）に心が傾くのは，日本橋の丸善画廊で個展をひらいた 1927（昭和 2）年のころである。その前後から，日本周辺諸民族の社会や文化についての本を読みあさる。人類学者鳥居龍蔵の古代史や諸民族の宗教に関する本，金田一京助のアイヌ研究の書物，松岡静雄の『日本古俗誌』『太平洋民族誌』といった日本人研究者の著作だけでなく，イギリスの民族学者フレーザー（J. G. Frazer）の『金枝篇』，ペリー（W. J. Perry）の『太陽の子』などにも目を向けていた。なかでも土方に，もっとも強い影響をあたえたのは松岡静雄である。松岡は海軍大佐で，1914（大正 3）年に第一次世界大戦が勃発すると同時に，連合陸戦隊を率いてミクロネシアのポーンペイ島を無血占領した。当時のポーンペイには，ドイツの南島支配の総督府がおかれていた。これにより，ドイツ領ミクロネシアは，日本海軍の統治下におかれたのである。「日本民俗学の父」柳田国男を兄にもつ松岡は病気を理由に退役後，日本をはじめ太平洋の歴史，言語や文化に精通し，多くの書物を著した。

土方は母を亡くした 1927（昭和 2）年 7 月に出版された松岡の『ミクロネシア民族誌』に強烈な刺激を受ける。その本は松岡が軍人時代に巡航した島々での見聞や南洋庁の役人の報告，欧米の民族学者の文献に依拠してまとめあげたものである。松岡はそこで「日本人は古来から日本人であり，南洋人は古来から南洋人である」（松岡 1927：108）と述べている。日本の古俗と南洋の習俗とが表面上似ているからといって，双方を安易に結びつけるやり方は誤りであるという指摘である。土方は，ひとつの民族・文化のす

べてを詳しく，正しく理解することの重要性を提唱した松岡に啓発されたのである。また，土俗学（民族学）や考古学に素人であった松岡に親近感を覚えたのであろう。土方は松岡がなし得なかった「現地調査」によって南洋の人々の生活と彼らの文化をありのままに記述することに意義を見い出したのである。

ミクロネシアでの調査にあたって土方は，自分の先史文化への関心が，「学というような専門的なものではなく興味本位なものである」ことを明らかにしている。けれども，土方は横須賀の貝塚遺跡の発掘現場にも足を運び，土器片や石器を採集し，それを書物に照らし合わせて考古学的考証を試みるなど，ミクロネシア調査の予備的経験を培かっていた。1929（昭和4）年2月の「南洋行き次第」という題の日記に，「その（南洋の）土俗とその伝説とは，その歴史とその文化とは，きっと私に尽きない興味の源泉となり，飽きない研究の対象となってくるに違いない」と記している。これは，それまでの文献渉猟でつくりあげた「南洋の原像」を実感し，日本人として初めてミクロネシアで本格的調査・研究を試みる，土方の不安と期待が入り交じった心境を吐露しているとみなせよう。

土方がミクロネシアを調査地に選んだ理由のひとつに，寒さ嫌いの性格がある。昭和3年2月の日記に「青い海に浮かぶ海」という詩をのせ，東京と別れる一節を述べたあと，

私の血は常夏の海と憧れる
その南の青い海の只中に浮かんでいる小さな島は
私のためにしばらく好もしい生活と，それから
私のために静かな墓場とを用意してくれるだろう　（詩誌『炬火』37号にも掲載）

と詠んでいる。

これは，椰子の木や熱帯の草木のもとで豊かに暮らす南洋の人々とともに生活するという宣言でもある。土方は，自分なりの「未開社会」ないし「無文字社会」にたいするイメージを胸に秘め，1929（昭和4）年3月にミクロネシアのパラオへと旅立った。

パラオに着いた4日後から，土方は松岡の本を見てから脳裏に焼きついていたアバイ（男子集会所）の絵を写しにゆく。大きな集会所の破風，桁や梁に色彩豊かに刻みこまれたこの絵は，文字をもたないパラオの人々の出来事の記録である。この絵こそ，土方の先史文化への関心と原始芸術への興味とを満たしてくれる研究対象であった。それから毎日のように，木偶，伝統貨幣，石柱群，遺跡・遺物，洞窟葬跡などを見て歩き，長老から伝説・神話などを聴き書きする調査を続ける。時には，水彩画を描いたりもする。

この調査で，土方はパラオの人々がその歴史や伝統文化に関心を示さなくなってきたことに憤慨する。パラオの古老が死ぬたびごとに，「古いパラオは死んで行くので，遅くとも今十年してからだったら古いパラオを知る事はほとんど不可能になるだろう」と，1929（昭和4）年6月の日記で危機感をつのらせている。パラオの過去を記録にとどめ

ることの情熱と使命感がいっそう強まると同時に，土方にはパラオ語が大きな障害になってきた。日本語教育を受けたパラオ人を通訳に調査をという目論見がはずれたからである。通訳として日本語がわかる若者がいないだけでなく，その若者は日本の「桃太郎」や「花咲か爺さん」の話には興味があっても，パラオの昔のことなどにはまったく気にもとめないからである。そのような窮地を救ったのが，大工の杉浦佐助である。

杉浦は13年間もパラオに住み，パラオのあちこちの村に知人をもち，難しいパラオ語を自由にあやつることができた。土方は杉浦の彫刻の師になる交換条件に，通訳を依頼したのである。杉浦は単なる通訳としてだけでなく，土方に日本時代になってからのパラオの人々の考えや生活の変わりようについてもよい情報提供者であった。こうして，土方と杉浦のコンビはパラオの村々を歩き回り，土方の興味の対象をしらみつぶしに調べあげることになる。当時（1930年ころ）のパラオには，政治・経済の中心地コロール島のほか，本島バベルダオップに10か村，カヤンゲル，ペリリュー，アンガウルそして南西離島の島々があり，6,000人のパラオ人と2,000人の日本人が住んでいた。

土方は南洋庁から依頼され，公学校（3年制のパラオ人小学校）で講演したり，彫刻を教える仕事にも精を出す。他方で，ドイツ人民族学者クレーマー（A. Krämer）が1908年に行ったパラオ調査の報告書を手に，古いパラオを研究する。また，日本から調査に来た考古学者の八幡一郎（東京帝大人類学教室）の案内役をしながら，考古学の調査法を実見した。そして，パラオへ来て3か月めに南洋庁の嘱託となり，公学校で島の子供たちに木工を教え始める。土方はカイバックルというパラオの手斧を使い，厚板にアバイ絵を彫り込む技術を子供たちに教えた。この芸術教育のため，パラオの村々の公学校を数か月ずつ回るのが仕事になった。ひとつの村で2～3か月の滞在は，村人と生活をともにし，子供の遊びや歌・踊りを見，古老から石像や遺跡にまつわる伝承，神話，昔話，信仰・宗教などを，上達したパラオ語で掘り下げて聞き取る絶好の機会でもあった。1931（昭和6）年にはその成果を「伝説遺物より見たるパラオ人」の題目で論文を発表している。

パラオでの生活も2年が過ぎ，パラオの先史文化を中心とする歴史をほぼ知りつくした土方には，パラオでは実感できない「南洋原始」への探求心が強くなってきた。日本の植民地経営が進み，多くの邦人が進出するにつれ，パラオの人々の生活も日本化へと拍車がかかった。そのころのパラオは，土方が日本で頭に描いていた「南洋」の姿とはほど遠い，「植民地支配」をしいられつつある「半未開人」の姿であった。より「原始」な世界を求めて土方はひとりで，パラオ南西離島の旅に出る。しかし，ソンソロール，トビ（現ハトコベ）などの島で目にしたものは，若者がパラオに移住して老人だけが島で細々と生活する姿であり，カトリックのスペイン人神父が人々の生活慣習を廃棄させて高圧的にキリスト教を押しつけている姿であった。

パラオ離島の現実に失望した土方は，パラオの東方千数百キロの洋上の孤島，サタワ

ル（サタワル語にはlとnの区別がないため，土方はサテワヌと表記）にゆきつく。この島に7年滞在することになるが，サタワルをはじめヤップ島の東に星屑のように連なる島々の様子を知ったのはふとした偶然からである。パラオの北にあるカヤンゲル島に，パラオの母系氏族の起源伝承の調査に出かけたとき，ひとりのサタワル出身の男に出合った。その男，オジャレブルが，月夜の砂浜の上で語るサタワルの話は，土方の心をとりこにした。

1931（昭和6）年9月，200トン足らずの機帆船長明丸で，土方はオジャレブルを案内役に，杉浦とともにパラオを離れる。ヤップ離島に「最も文明の影響の少ない，島民らが昔ながらの生活を続けているところ」を探すためである。船が立ち寄る島々で，土方は日本人商人が島の人々にコプラを生産させ，それと引き換えに品物を売りつける様子を見て落胆する。18日もの船旅ののち，定期航路の最終地，サタワル島にたどり着く。首長の指揮のもとかいがいしく動きまわる人々の姿を目にし，オジャレブルが話した10年前の島の生活と変わってないことに安堵する。土方は島へ来て2か月後に，「この島の日本人というのは私と，私と一緒に来たお弟子の大工さんとただ二人だけ。まだ言葉がわからないので面白いというところまでゆかないが，それでも島中でいちばんえらいのだからちょっと気持ちがいい。私は満足している。粗末ではあるが女たちが一日かかって作った食べ物を，青空の下で，椰子の風の中で，つまらないことに笑い興じながら，食べる食事を。」（土方1943：8）と書いた手紙を日本に送っている。

土方は島へ上陸するさい，タバコを首長に差し出し，来島の目的を述べている。そののちも頼みごとをするときには，島の人々がもっとも欲しがるタバコや石鹸，ビスケットなどをお礼にした。絶海の孤島とはいえ，島には島のルールがある。それは島人だけでなく，島へ来る「よそ者」にも適用される。とくに島入りの手続きは厳格で，入念な「外交マナー」が要求される。万一，礼を失すると首長から言下に入島を拒否され，来た船ですごすごと引き返すしかない。その点，土方は「我こそは統治国の臣民なるぞ」といった素振りも見せず，島の人と同じ立場に身をおいて島の生活に溶けこんでゆく。手紙に「島でいちばんえらい」と書いているのも，魚にしろ食べ物にしろ最良のものを首長より先に，よそからの客に分け与えるという島のしきたりをさしているのである。けっして自分が首長より権威があり，権力をもったと言っているのではない。

土方は首長に頼まれ子供たちに日本語を教えたりもする。サタワルには公学校がない。毎年，南洋庁の役人や警察が8～9才になった男児をヤップの公学校に入学させるために船で強制的に連れてゆく。幼い子を離す親たちの不安と悲しみは大きく，サタワルでの日本語教育を土方に懇願したのである。また，お正月になると土方はパラオから取り寄せた米で餅をつき，島の人と新年を祝ったりもした。このように，土方は威張るのではなく，心やすく島人とつき合っている。

土方は島人から「センセイ」と呼ばれ，一軒の家にお手伝いさんと住み，サタワルで

の生活を始める。その女性，イニポウピーは第一首長の母系一族の娘で，島の習慣や伝説を実によく身につけていた。彼女は土方のサタワル語の先生でもあり，土方が「島の人」として暮らしてゆくためのタブー，犯してはならない聖域，人との接し方などを教える保護者でもあった。土方が誰かれとなく気さくにつき合えるほどのサタワル語を覚えるのに，3か月とはかからなかった。母音9個，子音15個からなるサタワル語の表記法をつくり，昔話をサタワル語で採集する。周囲6キロの島を舞台に，280人の人々が日々くりひろげる営み，島の出来事，そして呪いや儀礼をつぶさに観察し，克明に書き記す作業を7年間続ける。島の人とカヌーで無人島に出かけ，航海術の実際も体験する。このような参与観察による調査とともに，母系氏族の移住伝承や氏族制度，政治・社会組織，土地の所有や相続法から，母系家族のしくみ，結婚・離婚，さらには神と人のかかわりにいたるまで，あらゆることを調べあげている。そして，島での民族学的調査が一段落した後半の3年間は，絵を描き，木彫りをつくり，詩作にも多くの時間を割いた。

土方の調査方法は，民族学者にありがちな，自分の関心やテーマの枠組みに必要な情報だけを収集し記述するものではない。島の人々があたり前のこととしている行動や，島で繰り返し起こる事件を参与観察し，脈絡を理解したうえで，さらにその背景や外延を聴き書きによって補い，異文化を理解するやり方である。土方の視点と方法は，民族学の研究者が長年のフィールドワークを行ったとしても，気付かずに見落としてしまうような「鍵」となる事象を，細やかな目で捉えるアプローチである。サタワルについての最初の著書『流木』の序文で，土方は民族学（者）とその道に素人である自分とのかかわりについて，つぎのように述べている。「私は，民族学，人類学の論文などは書けない」けれども，真面目で嘘のない資料を専門家に提供して，「ただ少しでもお役に立てれば幸いである」と（土方 1943：4）。この土方の本意は，南洋に発つ前に目指していた，研究姿勢と何ら変わっていないし，多くの著書と論文に貫きとおされており，それらを世に出す原点になっているのである。

土方がサタワル滞在中に綴った7冊の日記からは，不幸な殺人事件を別にすれば，サタワルの人，社会，そして文化にたいする不満や批判を述べた箇所を見いだすことができない。してみると，土方はこの孤島で追い求めていた「南洋原始」を実感できたにちがいない。土方にとってサタワル島は，南洋の原像と重なり，そのうえ民族学的な探求心と芸術家としての興味とを満たしてくれる「理想」の島になったのである。

3　土方の南洋研究

1939（昭和14）年1月に土方は8年ぶりにパラオへ戻る。1万3000人の日本人が住み，コロールの町には商店が軒を連ね，自動車も走っている。バベルダオップの草山には瑞穂村や清水村など，日本人の開拓村がつくられていた。1933（昭和8）年に国際連盟か

らの脱退を宣言した日本が，南洋群島を併合し多くの移民を送りこみ，軍事基地の設営に着手したからである。土方はこの変貌ぶりにただただ驚いている。南洋庁は日本からの移民に土地を提供すべく，島民の習慣や土地制度に関する調査を計画していた。ミクロネシア研究の第一人者になった土方をほうっておくはずがない。さっそく南洋庁の役人相手にサタワルについての講演に駆り出された。これがサタワル調査の処女論文「ヤップ離島サトワヌ島島民の慣習」（土方 1939）となる。土方は島民の社会調査の責任者として南洋庁の地方課に勤務することになる。南洋暮らしも 10 年になったので，土方は 1939（昭和 14）年に 4 か月の休暇をとり帰国する。

東京に滞在中，土方は弟子・杉浦佐助の個展を開き，自分が収集した民族資料の展示会を行う。土方は持ち帰った民族標本資料 300 点余を，「土方久功氏蒐集南洋土俗品展」として京橋の南洋群島文化協会事務所と東京帝国大学で公開展示した。その後，それらの資料を東京帝国大学理学部人類学教室に寄贈した。寄贈先を東大にしたのは，考古学者・八幡一郎との関係にもよるが，創設されたばかりの人類学科で長谷部言人主任教授をはじめ，新進気鋭の民族学者・杉浦健一らが活気にあふれる雰囲気のなかでミクロネシア研究に情熱を傾けていたからである。それに，東大の先生方が土方の研究を認めてくれたこともおおきな要因であった。八幡は土方の資料を東京人類学会編纂の『内外土俗品図集』に収載し，また『人類学雑誌』で考古学資料を中心に解説して土方の業績を学会に紹介した。土方資料はいずれも，学問的に貴重なものばかりで，現在大阪の国立民族学博物館に収蔵されており，その一部はオセアニアコーナーの展示に供されている。

土方は 1934（昭和 9）年 8 月にパラオへ帰るが，多忙を極める。本務として杉浦健一や東北大学の法社会学者・中川善之助教授などと「島民習慣調査要綱」づくりに取りかかる。これは，南洋群島全域で氏族制度，親族，相続と土地制度を調べるための 50 項目からなる調査票である。そのほかに，夏休みを利用して日本から来る医学，水産学，農学，植物，地学などの研究分野で著名な学者や，学生の調査団の案内に追われる。「南洋に着いたその日から，お客さん相手で南洋に帰ってきた様な気がしませんでした」と 9 月の日記に書くほどであった。役職柄だけでなく，それらの研究者にとって土方は，学問的知識を授けてくれる面倒見のよい「南洋の博士」であった。

中川は昭和 13 年と 14 年（1938 年と 39 年）にミクロネシアで調査をし，論文を書いている。その冒頭に，「土方君が二年目の調査で同行してくれたために，私が前年に取ったノートの聞き間違いや不正の回答をいくつも発見できた」と土方の知的貢献に謝辞を述べている（中川 1943：130）。土方は学者たちの「便利屋」に甘んじることなく，南洋庁の嘱託になった杉浦健一とともに，「調査要綱」に基づく調査を行う。杉浦は土地制度，土方は部落組織と調査項目を分担している。1941（昭和 16）年には，念願であった南洋群島を一巡する調査旅行に出かけた。土方はパラオにいるあいだに，それまで

の調査資料をまとめ，社会組織，親族，婚姻，信仰や宗教などについての論文をあいついで発表した。その数は20本にもなり，『人類学雑誌』，『民族学研究』など，学会の機関誌にも掲載されている。調査を行い，その成果を絶えず発表し続ける土方の研究姿勢は，専門の研究者でも真似のできることではない。その姿勢こそ，ミクロネシアの人々のありのままの姿を記述することで，研究者だけにではなく「島の人々のためにいくらかでも役に立ちたい」という土方の本音を窺い知ることができる。

4　土方の研究成果

土方は作家の中島敦とのパラオでの出合いもあり，役所勤めに息苦しさを感じた1942年（昭和17年）に帰国する。太平洋戦争に突入した日本では，南進論が叫ばれ，南洋の社会や文化の情勢を知るために，多くの欧米の書物が翻訳された。そのなかで，松岡の『ミクロネシア民族誌』も岩波書店から復刻されることになった。復刻版の巻末で，人類学者の清野謙次は「原本の意味不明の箇所やミクロネシア語の誤りを是正するのに土方の労を煩わした」と記している（清野1943：658）。自分を南洋研究へ誘った本を，自ら校訂する土方の喜びは計り知れないものがあったにちがいない。そのような状況下，土方にも本の出版の声がかかってくる。

土方はパラオについては1冊，サタワルに関しては5冊の単著を世に出している。論文については学問的に評価されるものだけでも30本にのぼる。単行本のうち，『パラオの神話伝説』(昭和17年, 大和書店),『流木』(昭和18年, 小山書店),『サテワヌ島民話』(昭和28年，三省堂）の3冊は，1970年～80年代に復刻されている。このことからも明らかなように，土方が収集した資料の質の高さとその記述内容の確かさは，人類学，民族学，神話学および言語学の研究分野で，今なお高く評価されているのである。

『パラオの神話伝説』には60話がおさめられている。パラオ世界の創世神話から「蟹と鼠の合戦」まで多様なモチーフの伝承を知ることができる。土方はそれらの話を，ただ聴き書きによってだけでなく，アバイ絵の物語を追いながら採録した。付録に模写したアバイ絵も掲載されている。この本は当時のパラオの人々の心の中に生きていた精神文化を伝えており，学問的にもかけがえのない資料である。

『流木』はサタワルの人々の生活を，1931（昭和6）年9月に土方がサタワル島に上陸してから数年間に起った出来事を，一年の日記の体裁で詳細に書き綴ったものである。その内容は，サタワル社会の忌避習俗，通過儀礼，社会組織，財産の所有形態から，労働慣行，航海への情熱，呪術・宗教的観念など広範な分野におよんでいる。この本で土方は，私見や主観的価値観をはさむことなく，サタワルの人々のありのままの営みを描いており，これは1930年代のサタワル社会の貴重な生活記録である。

『サテワヌ島民話』においては，人々が語りついできた180編余りの神話や民話をお

さめている。そのうちの27編は，サタワル語と日本語との対訳である。ここでも，土方は正式な言語学の教育を受けなかったにもかかわらず，奇才ともいえる「語学力」を存分に発揮する。それは，日本語にくらべ，はるかに複雑な音韻体系をもつサタワル語の音素を的確に聞き分け，アルファベットによる一貫した表記法に示されている。1930年代にこの地域で，200編もの口頭伝承を収集した研究家は，欧米にもいないことからも，この著書をとおして土方が精魂をこめた仕事の偉大さが窺える。

土方の民族学的研究の代表作は『ミクロネシア＝サテワヌ島民族誌』（昭和59年，未来社）である。これは未発表の資料と既発表の論文を加筆修正して一冊にまとめあげた本である。この『民族誌』と『サテワヌ島民話』の作成のきっかけは，柳田国男との出会いにある。

土方は1950（昭和25）年に柳田国男に南洋の話をする機会をもつ。柳田は『流木』の著者，土方の研究にそれ以前から強い関心をもっていた。柳田は『流木』を読み，日本民俗学の若手研究者に一読を勧めたほどである。『流木』に，農民や漁民（常民）に対する，民俗学の研究法にはない新鮮さを感じたからであろう。それを機に，土方は成城大学の民俗研究会に顔を出すことになる。そこで発表もし，学者の報告も聞き，また贈られた柳田の自著や石田英一郎（東京大学文化人類学教室の創設者）の文献をメモにとりながら精読し，昔話と伝説について研究する。そして，「サテワヌ島民話」をまとめあげる。その原稿を見た柳田が「これは大変な本だ」と評価し，出版の手はずを整えてくれたと，土方は『復刻サテワヌ島民話』の序文に書いている（土方1975：Ⅱ）。

柳田が主催するこの研究会には，大藤時彦，瀬川清子，鎌田久子など民俗学者だけでなく，前述の石田をはじめ，宗教人類学者の古野清人や社会人類学者の馬淵東一，民族学者の岡正雄ら国際的にもその名が知れた研究者も加わっていた。土方はそこで民族学，人類学の研究方法を学びとり，「素人研究者」としてそれまで書きためてきた論文を再構成し，「民族誌」のスタイルに書き改めた。しかし，その記述内容は，あくまでもサタワルの人々の生活の全体を浮き彫りにすることをねらっており，『流木』の平淡な筆致と変わるところがない。民族学者・石川栄吉は，『日本民族学の回顧と展望』（昭和41年，日本民族学会）のなかで，豊富なオリジナル資料を所有している土方が，「昭和31年に発表されたパラオの石製遺物に関する詳細な報文以後，絶えてこれに接することができないのは残念である」（石川1966：348）と記している。この『民族誌』はその期待にそう好著である。

土方の論文のうち，「パラオ島民の親族縁族」，「パラオの石神並びに石製遺物報告」，「パラオ紋様土器片採集記」の3編は，1973年にグァム大学のミクロネシア地域研究センターの刊行物として英訳された。それらは，ミクロネシアの欧米研究者の著書にかならず引用されている。また，土方の全業績は，1990年から93年にかけて『土方久功著作集』（三一書房）全8巻として刊行された。それらの著作に対し，ミクロネシアの人々や外国

人研究者の強い要望を受け，笹川平和財団島嶼国基金の援助で英訳することが可能になった。著作集の 4 つの巻『パラオの社会と生活』（1990 年），『パラオの神と信仰』（1991 年），『パラオの神話と伝説』（1993 年），『流木―孤島に生きて』（1992 年）が英訳された。これらの土方のミクロネシア研究の成果は，国際的に人類学，民族学の多くの研究者に認められ，オセアニア学の進展に大きく寄与している。とくに，パラオやサタワルの人々から，「真の歴史」として喜ばれている。

5　民族誌家としての土方

『流木』と『ミクロネシア＝サテワヌ島民族誌』は，サタワルの社会と文化についての総合的記述である。土方はそこで，サタワルの人々が食料資源を共有し，行動様式の基本を「神への恐れ」と「恥」の観念に求めていると述べている。まさにサタワルの人々の「心」（エトス）をも把握し，描きあげているともいえよう。それらの記述内容は，文化人類学や民族学の研究者の仕事と比較しても決して遜色がない。逆に，民族学者による調査では生みだすことのできない「事実をして語らしめる」重みがある。また，土方の記述の「偽りのなさ」は，50 年後にサタワル島で調査を行った，私の経験でも実証された。土方の仔細な観察と島の人々との真摯なかかわりあいのなかから編みだされたこの生活記録は，「民族誌」の条件を十分にそなえているということができる。したがって，私は土方久功を「民族誌家」と位置づけたい。

ここで民族誌と民族学（文化人類学）とについて簡単に説明しておこう。民族誌は，フィールドワーク（現地調査）によって収集した資料に基づいて作成される，特定の社会と文化についての記述である。それにたいし，民族学は世界の諸民族の社会と文化を比較研究し，一般理論ないしモデルによって異文化を解釈する学問である。つまり，民族学の基礎は，多くの研究者の手による個別社会の民族誌にある。民族学の現地調査は，自分の文化とは異なるほかの文化で実施することが伝統となっている。言語，制度，慣習，観念などの異なる文化において，それらを把握し，民族学のことば（学術的用語）で書き表わすには，研究者自身に身体的試練はもちろんのこと，深い洞察力と想像力，緻密で体系的な構成力が要求される。

イギリスの人類学者，エヴァンズ＝プリチャード（E. E. Evans–Pritchard）は，人類学が目的とする異文化理解とは，基本的には「文化の翻訳」の問題であると述べている。異なる社会・文化の諸現象を翻訳する作業は，単なることばの置きかえだけでなく，その社会のもつ分類体系，行動規範，価値観から，象徴や比喩などの言語表現にいたるまでの，総合的理解を前提にする。このような点から判断しても，土方の『流木』と『サテワヌ島民族誌』は質・量ともに，「本物の」民族誌とみなせる。したがって，土方は民族学の専門家ではないけれども，オセアニア研究の民族誌家として第一人者の地位を

占めている。

私事にわたるが，私がまだ大学院生でミクロネシアでの調査を計画していた1974年の春に，豪徳寺の土方邸にお邪魔したことがある。それは，土方から南洋群島の文献，パラオやサタワルのお話を伺うことが目的であった。土方は日本統治時代の日本の人類学者の研究方法についてふれられ，「学者の仕事は，島の人々の考えを重視せずに自分の頭でものを書いてしまう」ともの静かに語られたのを今でも鮮明に覚えている。このことばは，ややもすると既成の理論やモデルを金科玉条とし，それに依存して調査地の事象を把握しようとする，専門家にたいする民族誌家の批判ともうけとれる。

私は念願かなってその4年後，1978（昭和53）年から80（昭和55）年にかけて，2度にわたり延べ15か月間，サタワル島で調査することになった。国立民族学博物館の石森秀三（現　北海道大学観光学高等研究センター長）と秋道智彌（現　国立総合地球環境学研究所副所長）との共同調査であった。私の調査テーマの一つは，「サタワル島の社会・文化変化」であった。土方の著書や論文から浮かびあがってくる1930年代のサタワル社会や人々の考えが，50年後にどこがどのように変ったかを逐一聞きだしていったのである。その際に驚いたことは，土方が記述した事項はもちろん，固有名で登場する人物の系譜および彼/彼女らの生活史に，ひとつのくいちがいもなかった点である。この記載された内容の詳細さと正確さは，土方がサタワル語を「第二の母国語」とし，「サタワル人になりきっていた」という事実を如実に物語るものであろう。

それほどの土方でも，サタワルの精神文化の根源をなす，「秘儀的知識の世界」の共有者にはなれなかった。氏族の起源神話，作物の豊饒，嵐鎮め，占い，航海術など，島人の活動の源泉ともいうべき知識はすべて神から授けられたもので，よそ者に漏らしてはならないという不文律があった。それを破ると神から死の制裁があると人々は信じていたからである。島人がその知識をつかうとき，かならず神と交流して神の加護を受ける。土方の『民族誌』には，そのための呪文や儀礼過程などのパフォーマンスの記述が欠けている。これは民族学者の「民族誌」としては致命的な弱点である。しかし，島人の「心の宇宙」に土足で入りこまなかった，民族誌家・土方久功の「良心」の方に強く惹きつけられるのは私だけであろうか。

土方は二度とミクロネシアに足を踏み入れることなく，1977（昭和52）年にこの世を去った。その4年前の日記に，パラオやサタワルを再訪しないわけを，「今頃すっかり変わり果てた南洋に出かけていって何を見，何を考えよと言うのか」と記している。土方は13年かけて南洋で創成した自分の「心の聖域」を冒したくなかったのである。

註

本稿は，1991 年 11 ～ 12 月に世田谷美術館で開催された展覧会「土方久功展―南太平洋の光と夢」の図録に掲載した拙論「民族誌家・土方久功のミクロネシア研究」に 20 年後の現在の状況をふまえて大幅に手を加えたものである。

文　献

土方久功

1931 「伝説遺物より見たるパラオ人」太平洋協会編『太平洋圏・民族と文化 上巻』河出書房，631–714 頁

1939 「ヤップ離島サトワヌ島島民の慣習」『中央大学学報』14 号，4–31 頁

1940 「パラオ島民の親族縁族」パラオ熱帯生物研究所編『科学南洋』3 (1)，27–42 頁（Translated by T. B. McGrath, *Palauan Kinship*, Micronesian Area Research Center Publication No.1, Garrison and McCarter, 1973）

1942 『パラオの神話伝説』大和書店（1985 年 三一書房より復刻）

1943 『流木』小山書店（1974 年未来社より『流木―ミクロネシアの孤島にて』として復刻）

1953 『サトワヌ島民話―ミクロネシアの孤島』三省堂（1975 年 アルドオより『サトワヌ島民話―ミクロネシアの孤島』として復刻）

1956 「パラオの石神並に石製遺物報告」日本民族学協会編『民族学研究』20 巻 3･4 号，103–155 頁（Translated by T. B. McGrath, *Stone Image of Palau*, Micronesian Area Research Center Publication No.3, Garrison and McCarter, 1973）

1960 「パラオ紋様土器片採集記」『人類学研究』7 巻 1･2 号，66–89 頁（Translated by T. B. McGrath, Some Ceramics of Palau, Micronesian Area Research Center Publication No.2, Garrison & McCarter, 1973）

1984 『ミクロネシア = サテワヌ島民族誌』未来社

1990 『土方久功著作集 1：パラオの社会と生活』三一書房（Edited by Endo Hisashi, *Collective Works of Hijikata Hisakatsu: Society and Life in Palau*, The Sasakawa Peace Foundation, 1993）

1991 『土方久功著作集 2：パラオの神と信仰』三一書房（Edited by Endo Hisashi, Collective Works of Hijikata Hisakatsu: Gods and Religion of Palau, The Sasakawa Peace Foundation, 1995）

1992 『土方久功著作集 7：流木―孤島に生きて』三一書房（Edited by Sudo Ken'ichi, *Collective Works of Hijikata Hisakatsu: Driftwood, The Life in Satawal Island, Micronesia*, The Sasakawa Peace Foundation, 1997）

1993 『土方久功著作集 3：パラオの神話と伝説』三一書房（Edited by Endo Hisashi, Collective Works of Hijikata Hisakatsu: Myths and Legends of Palau, The Sasakawa Peace Foundation, 1996）

石川栄吉

1966 「民族学的地域研究の発展―オセアニア」日本民族学会編『日本民族学の回顧と展望』342–349 頁

清野謙次
1943 「南洋研究の先覚者松岡静雄大佐を偲ぶ」松岡静雄『ミクロネシア民族誌』岩波書店，623–658 頁
中川善之助
1943 「ミクロネシアの婚姻法」『帝国学士院記事』2 号，129–164 頁
松岡静雄
1927 『ミクロネシア民族誌』岡書院（1943 年岩波書店より復刊）
Palau Community Action Agency (ed.)
1976 *A History of Palau,* Vol.1, *Traditional Palau and The First Europeans*.
1977 *A History of Palau*, Vol.2, *Traders and Whalers, Spanish Administration, German Administration*.
1978 *A History of Palau*, Vol.3, *Japanese Administration, U.S. Naval Military Government*.